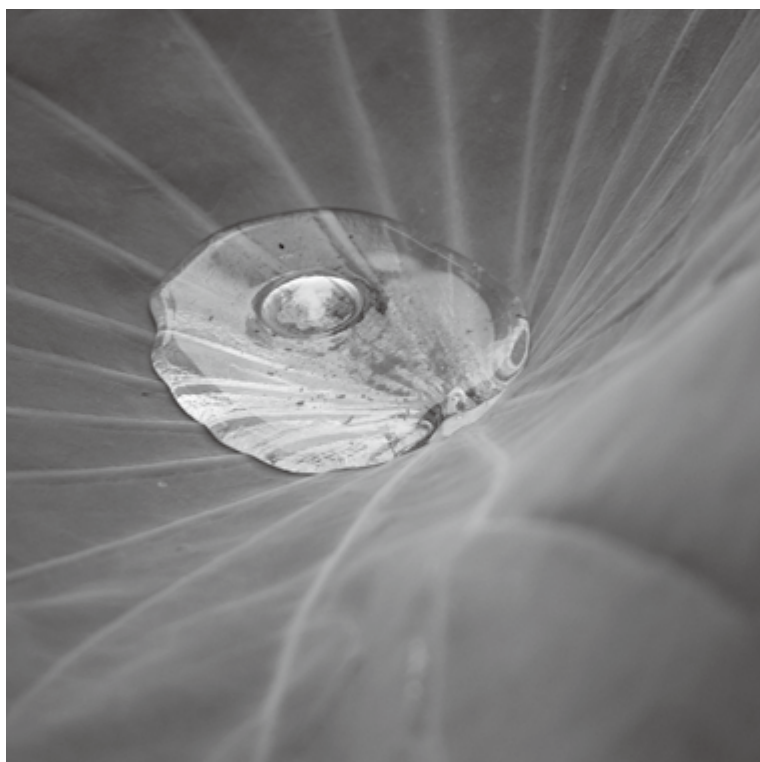


あを

8

2010



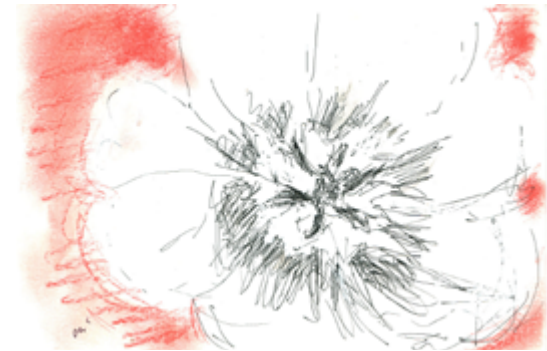


蘇州所見 「保多孝三展」(篆刻美術館刊)より

亡くなられた篆刻家のT先生が口癖のやうに「文人」に憧れそれに成るべく研鑽されてゐた。篆刻・書は自家薬籠中だが文章を作ることを心がけられた。漢文はもちろんだが俳句にも造形を深められた。手紙は殊にうるさく筆で候文を書くやうひとにも勧められた。最後は呉昌石ばりの絵を描いて楽しまれた。山田正平先生もまはりに媚びない絵をお描きになられる。篆刻家は学問が邃く、中国の文人思想を視野に入れてゐるのだらう。保多孝三先生も絵をよくする。「蘇州所見」は所謂文人画といふ句ひはしない。文人が描くから文人画といふおもひが伺へる。。

あを

八月



屋上庭園

花をへてはこねうつぎの幹太し
とねりこの花のまぎるゝ梅雨の空
山百合のがうと開きし向う脛
山蟻の跨いでゆきぬ蟻の衝
空調音はブブゼラの音梅雨曇

本町三 佐藤喜孝

拾遺

西王母東王母故^かれ初日大
祖母が負ふねんねこぼんでん赤が好し
いちぢくに寒肥さびしければやる
吹雪く中動かぬものに畦の杭
弟よ天を蔽ひてあとりに来る

つるぎひたしで
剣地東出

定梶じょう

所 沢 須賀敏子

挿木して四十年の額の花
父母のこと姉しか知らず豆の飯
更衣和服リメーク母を着る
梅雨深し息子と名のる電話あり
サツカーや男の汗の潔さ

本町三丁目 鈴木多枝子

山法師お寺の屋根は檜皮葺
杏の香屋根は苔むすやうに見え
アトリエに青田の匂ひ満ちてをり
夏蜜柑売り声の吸はるる石畳
干草を返して匂ふ北の国

引 鴨

浦 和 竹内弘子

木の上に鷺の吹かるる抱卵期
羽くろき川鵜水面を切つてとぶ
チヨットコイとは小うるさき春の鳥
遠目には毬のやうなる鳩の雛
引鴨や人は踵をかへすのみ

白 玉

田 端 田中藤穂

白玉や昭和良き世か悪しき世か
兜虫角もつものは闘へり
ぐみの実や電池換へたる鳥時計
海見たし未央柳は蕾持ち
泰山木江戸の天麩羅味の濃し

竹藪に風静まりて二輪草
新緑の中に駆け込み深呼吸
むらさきの雨のそぼ降る桐の花
月見草線路の脇で音に泣く
天の川見てゐるわたし星の中

山 莊

信州の植田登りのバス唸る
夏草やおのおの板塀くぐりきし
六月の蒲公英露草羊雲
新緑や庭の蓋付ドラム缶
郭公や山莊息を吹き返す

風 薫 る

胸式と腹式呼吸風薫る
夕風に墓鳴立てて恙無し
夏野原買物難民真顔かな
支援する移動販売車蟻の列
水捨ててる子☒のとびはね足搔く

梅 雨

梅雨の入松ぼっくりは青きまま
たまさかに月すがすがし梅雨晴間
ひそやかに生きてゐるなり蝸牛
浜木綿や心に刻む波の音
竹箒新しくせり夏落葉

河田町 堀内 一郎

通るたび灯の点く路地の朧かな
見つからぬ一書あぐねて明易き
目が開けられぬ父の日の眼鏡かな
空ろな世噴水しかと天を指す
紫陽花を廻ぐる色香に遠ければ

中 井 森山のりこ

よく通る木遣の小節夏祭
はからずも時計草咲く時の記念日
何鳥か羽根一枚を梅雨の庭
留守の間に紫陽花の色変りけり
咲き昇る勢ひ貫ふ立葵

落 合 森 理和

鍋葉缶瓦斯台磨く心太
鼻の下汗の吹き出す空気圧
空の点酔ふやう庭へ梅雨の蝶
休まずに空へ吸はるる梅雨の蝶
つるに葉に滴の世界青ぶだう

鍋屋横丁 吉弘 恭子

木の吐息花の喘ぎや樺の忌
池の面おたまじやくしの波乱かな
めまとひのあそびすぎたる宙のなか
掌をこぼれし黄色春の宵
握握のなかに春の風すこし

鹿 袋 渡邊友七

空蟬や一つの過去にしかすぎず
痛む胸に蝶は言葉のごと降り
鴨翔って尚昏れのこる海の芯
鳴く蛙街中にふと一枚田
目ばかりの顔して田植の姉帰る

清 瀬 赤座典子

くちなしの純白でゐし三日間
花火好き母となりての里帰り
梅雨晴間図鑑と比ぶ庭の鳥
夏至の日の明るき七時赤提灯
短夜や指で繰るもの玩具めく

聖蹟桜ヶ丘 安部里子

道歩く墓に声かけ我が庭に
今一人サイダー飲んで何もせず
十葉の八重の総苞しかと見た
出かかった言葉飲みこむ心太
残り物ごま和納豆六月尽

曳 舟 遠藤 実

心太今なら少しわかる齡
百葉の長と云ひたし冷し酒
星涼しいずれ一人になる二人
父の日や小さな茶房の奥の席
軽く云ふ癌の告知や座禪草

逗子 鎌倉喜久恵

夏の天砲台の跡のこす丘
芒挿すはやぶさの飛ぶ宙に向け
青葉汐海月をのせて風ぎわたる
草むしり指の先より暮れにけり
髪洗ふ治りはじめの傷痒し

川崎・小田栄 木村茂登子

初物の目映いばかりさくらんぼ
薄紅の螺旋三寸もぢずり草
片蔭へとをぢさん顔の盲導犬
水草の中に縄張り熱帯魚
水羊羹皿ごと冷し客を待つ

老 鶯

白 金 齊藤裕子

をみなごはおしゃべりが好き柿若葉
走り梅雨サックス奏者に恋をする
短夜や覚めて切ない母の声
クレーン操る海の男や夏の空
同居して子は遠くなり額の花

京 橋 篠田純子

青葉風バスに前乗りうしろのり
苔の花杉本寺の階丸ろし
釦めく仁王の乳首薄暑かな
運慶の地藏くろぐろ青葉光
小節まはす老鶯自身酔ひたるや

あぢさゐの色づき染まる池の面
筍を只ころがして直売所
末席にやすらぎてをり葛ざくら
牡丹に天道虫の出合あり
深刻な話さらりと涼しげに

自販機にふるさとの水街暑し
突当り真白に咲きて七変化
記憶とは不確なもの夏の雲
群青色気位高く四葩咲き
浴衣復習銘菓ととのひお茶会を

懸り羽子の巻 脇起し歌仙

メールにて

かの懸り羽子も夜雨にしづくすや

蒲団の襟の別珍に顎

空青く祝ひの席に招かれて

庭の砂子に松の影あり

立待月いつのまにやら池のうへ

風爽やかに雲流れゆく

秋の蝶フランス映画の絵看板

電光文字に不倫のニュース

人ごととわらふ我が身も人想ふ

高みより見る東京の街

飯どきの平屋がつくる路地深し

のんびりと猫昼寝して居る

どこからかジャズが聞こえて月涼し

夜勤看護婦アイスを舐める

昨今のとみに賑はふ高尾山

ミシランかかへ外国の人

ことだまは戯れやすきもの花は満ち

犬は交りて亀は鳴くなり

春日向遊覧船は浅草へ

人力車夫の客引いてをり

襟あしといふもののあり火影あり

酒酌み交わす楽しき時を

新雪にシュプール描き滑り行く

夜行バスにて歳晩の街

ままごとのやうなふたりのほほゑまし

指輪を選ぶ銀座ティファニー

頼りにすきのふ作りしVISAカード

空を見上げて大きため息

二十日月だれも降らない山の駅

栃の実まるぶ古き田舎家

隠し田の穂穂の色抜けてゆく

行く父を追ふ二人のこども

手作りの菓子のか仕上がりて

重箱に入るれうり数々

見渡せば花や俳句の国を統べ

おのころ島に霞たなびく

ゑつ

不寝

竹洗

ゑつ

不寝

竹洗

ゑつ

不寝

竹洗

ゑつ

不寝

竹洗

音々

ゑつ

不寝

木枯

音々

前月作品

盛り上がる如くに若葉光りけり
 しゃべるだけしゃべりまくって夏座布団
 春の月またたき金星ぬざり来し
 新樹光髪切りて子の出勤す
 風薫る飼猫出すなどおふれあり
 ビルの間にどすんと大暑来りけり
 蒼空を恋ひて散るなりえごの花
 モーニングコールは浅漬の夏野菜
 寿福寺の箒の音とうぐひすと
 柿若葉気づかぬほどの雨が降る

森山のりこ

森理和

吉弘恭子

赤座典子

安部里子

遠藤実

鎌倉喜久恵

木村茂登子

篠田純子

芝尚子

喜孝抄

一人一句

尖塔に南溟の雲蜩集せり
 防衛庁官舎昼顔咲かせしづまれり
 菜の花の日曜行きて弥撒聴かな
 牛蛙遠くに聞いて明日香の夜
 六月の青銅めける箱根山
 人参咲き愛憎にぶくなりけり
 汗ばみて頂上に着くお富士山
 青煮それといふいきほひの渋うちは
 揺する風撫でてゆく風桐の花
 たかんなの伸び森閑と竹林
 衣更へて市井の妻になりきれず

佐藤喜孝

芝宮須磨子

定梶じょう

須賀敏子

鈴木多枝子

竹内弘子

田中藤穂

東亜未

長崎桂子

早崎泰江

堀内一郎



カリフォルニア

須賀敏子

昨日へと飛ばばアメリカ浅き夏
小満やカリフォルニアの風を受け
今朝も又金門橋は霧の中
よるべなく海馬寝そべる夏の夕
薔薇咲いてケーブルカーは窓全開
並びたる風力発電夏の天
滝巡りラオスの人に追越され
爆音となりてヨセミテ瀧落下
合羽着て瀧のしぶきと虹の中
顔程のまつぼつくりや瀧聞ゆ

七月作品より

吉弘恭子

いくたびも死なぬ病を紅桜

佐藤 喜孝

人間生れ落ちてから現在まで一生のうちどのくらい病気に罹っているのだろうか。人によつて生き死にに關わる重病にかかる人もいる。「この句は死なぬ病」を何度とも言っている。幸いにして重病でも死ななかつた病もその中に入っているのかもしれない。風邪ぐらしいしか病に罹つた事がない人もいることでしょう。おもしろい上中七の言葉に下五の季語がなんと華やかな「紅桜」がおいてある。重くても軽くても、病気を吹き飛ばす苦とも思わない心がひとと伝わってくる。

防衛省官舎屋顔咲かせしづまれり

芝宮須磨子

我家のそばにも官舎がある。通るたび子供が自転車に乗つたり乳母車の親子が笑いながら出かけるところに会う事がある。この句のように静かな防衛官舎がつまでも続く事を願っている。賑々しくなつては困る。朝顔と違つて、小ぶりの花で色も薄い。この句に

はこの季語しかないくらいびつたり。

揺する風撫でてゆく風桐の花

長崎 桂子

桐の花は、桜や梅と違つて咲き方が違う。花房が固まつて一つの花のようになつている。大きな花のようになつている。静かな風にもゆるやかな揺れる様は好ましい。しずやかに撫でるような風を体感すると、柔らかなころもちになる。桐の花のそれぞれの動きをいろいろ想像できて面白かつた。！

青葉若葉無色の風を袂にす

堀内 一郎

風には色があるはずがない。と思つていたら俳人は、空気にも風にも色があるようだ。しかしこの句の風は無色と目に見えているとすり。風は無色だが、至る所青葉若葉が好ましく街を彩っている。ここで『無色の風』と当り前のことを言っているのだが取り合せの妙。うまい俳句である。

新樹光髪切りて子の出勤す

赤座 典子

学生の頃、髪を切つて学校に行くこと失恋したの？と誰彼となく言つたり言われたりしたものだ。今ではそんな事は言わないのだろうか。若葉の緑が目眩しいうえに、髪を切つてすつきりとしたと感じた作者。きつと気持ちのいい出勤になつた事だろうとかつてにおもっている。

なにげなく人に添ひたい春憂

鎌倉喜久恵

我家は六人一緒に住んでいる。病人が居たり乳飲児がいたり毎日違う状況で日を過している。お一人住いの喜久恵さんにはとても考えられないほどのせわしさです。四季の中で何となく寂しくなつたりするのが春。寒季節からはかほかとして解放される感じがするのが春。どちらも春。その心地よい暖かさの所為だろうか。

「菖蒲湯をたてひとりなり楽しかり」こういう事もある。人間の欲望はなかなか解しがたい。が二句とも人の本質を突いていてほつとする事ができた。

モーニングコールは浅漬の夏野菜

木村茂登子

夏においしい野菜は、からだを冷してくれる胡瓜か甘酸っぱいトマトだろうか。どちらも夏には欠かせない。と私は思っている。起されたのは夏野菜の漬物の香りか、届けて下さつた方の電話かどちらにしても暑い夏には漬物が息を吹返させてくれる。横文字は俳句になかなか馴染みにくい、浅漬との取り合せが面白かつた。

柿若葉氣つかぬほどの雨が降る

芝 尚子

春雨は濡れていこうという位やさしい降り方をする。時々朝、葉っぱの上にくつも水滴を見ることがある。昨夜雨が降つたことを知る。寒い冬から暖かい春にいつの間にか移り、降っている雨も穏やかさを秘めているのかと思つたりもする。つやつやとした柿の葉に、居心地の良さそうにのっている水滴を思つてしまった。目に浮ぶようだ。

あをかき集

竹内弘子選



吉弘 恭子

恩光に委ぬ嬰兒のあし腕
白骨のままに吊さる梅雨さなか
たまゆらの白玉椿こぼれ落つ

面白い顔になりたる祭あと

日照り雲白穂に寄する蝗かな

彫刻の猫六月のベンチ占む

カプセルは地球へかへり梅雨の月

太鼓屋の代も替はれる祭かな

屋上庭園隅に枝豆実をつけて

雨後の道ゆくてにわかに夏野めく

妻連れてピエロめく夜ぞ蛙鳴く

蚊を打つて働き足りし妻の腕

長梅雨やはぐれ鳥の囁れ声

通学路はあぢさゐの道傘の列

消息は手作りといふ夏野菜

屋上に風呼んでゐるをみなへし

屋上の新樹の見ゆる交差点

屋上に見つけてうれし藪枯

田中 藤穂

渡邊 友七

木村茂登子

佐藤 喜孝

身のまわり少し片付け夏を待つ

やはらかき猫の足うら梅雨じめり

青ぶどうゆすれば一つ零れ落つ

一生のあるいは不作ちんちろりん

運動会聞こゆるマイムマイムかな

山眠る燃つては紙縊ならべけり

夾竹桃病むところをば撫で来たる

蜘蛛の囲や六月の雨ビーズとなり

ハンデルの落書のある今年竹

議事堂の露座仏に見ゆ枝茂り

朝靄にしずかに動くしらす船

梅雨空に塗りつぶされし水平線

戦争も国旗もなくてかたつむり

青嵐子育地蔵の供花ゆらし

ばら紅し足を組みたくなるベンチ

家中のあかり灯して梅雨の夜

米粒の半分の餌金魚釣

音もなくてふてふ又来赤子寝る

鎌倉喜久恵

定梶じよう

鈴木多枝子

篠田 純子

早崎 泰江

遠藤 実

芝 尚子

森 理和

梅雨晴間まずリハビリの歩を運ぶ

梅雨寒や読んでは捨てる古手紙

河骨の夢見るやうな黄色かな

幼児がでんぐり返し夏の芝

創業の碑文を伝う迷ひ蟻

改装の真白な囲み更衣

万緑や今朝の煙は西へ向く

森山のりこ

須賀 敏子

芝宮須磨子

長崎 桂子

東 亜 未

選を終えて

面白い顔になりたる祭りあと

恭子

「面白い」は、目の前が明るくなる感じを表す、心ひかれる、興趣がある、滑稽だ、たのしい。いずれも見ているこちら側を喜ばせてくれる。好ましい顔になったということのようです。

雨後の道ゆくてにはかに夏野めく

友七

見渡すかぎり夏草の生い茂つた野原は、殆ど見る
ことができなくなつたので、へ頭の中で白い夏野と
なつてゐる。窓秋>といった抽象的な捉えかたをし
た句が称揚されるようになつていますが、この「夏
野」は曾て作者が其処にあそんだ景を眼前にするよ
うなりアリテイがあると思います。

妻連れてピエロめく夜ぞ蛙鳴く

友七

面白いのですぐいただきました。フランスの無言
劇の道化役または人をおかしがらせるように振舞う
人へピエロ>ということですが、そう振舞わなけれ
ばならない成行きになつたとも考えられます。「蛙
鳴く」に哀感あり。

消息は手作りといふ夏野菜

茂登子

親子、姉妹、離れて暮らしていて、通信の方法は
いろいろあるのに無言に過ぎてしまふ。不意の宅

を終えて上がつてくる「しらす船」であつた。見る
べき物を見ている眼が秀逸。私はヨットにはかり気
をとられていた。

戦争も国旗もなくてかたつむり

実

つい先頃、サツカーのワールドカップが南アフ
リカ共和国で行われた。独特な細長い喇叭を吹き鳴ら
し大盛会であつた。

「かたつむり」には戦争も国旗もないが、やわら
かくておいしそうだから、天敵がいるのではないかと
危惧せぬこともないですが。



急便に長いこと逢つていないことに気付く。

蜘蛛の囲や六月の雨ビーズとなり

多枝子

西日本を中心とした今度の大雨による被害は未曾
有の事ですが、「六月の雨」はこんな風でした。ビー
ズで編んだような網をそのままに、何処かで雨やど
りしているのでしょうか、スパイダー氏は。

議事堂の露座仏に見ゆ枝茂り

純子

東京の墓地に、国会議事堂をうんと小さくしたよ
うなトンガリ屋根のお墓があつた。きれいに掃き清
められ、人の気配がないので、露座仏に似て見える
のかもしれないね。

朝靄にしづかに動くしらす船

泰江

朝がた、逗子の浜辺を散策した折、めまぐるしく
往き来する色とりどりのヨットの向こうに、漁船が
音もなく浜辺に近付いて来るのが見えた。しらす漁

吟行案内

場所 矢切の渡し

集合日時 9月25日(土) 十一時十分

北総電鉄「矢切」駅

矢切駅↓野菊の墓文学碑↓矢切の渡し↓

柴又帝釈天↓京成「柴又」駅

参加希望者は九月二〇日まで 幹事・佐藤喜孝

090-9828-4244

近世俳諧と漢詩文

参拾参

王 岩

一片氷心

涼しさになくなりさうなこゝろかな 子 功

この句は文化八年（一八一）版『見物塚記』（一瓢編）に見える。作者の子功については詳しく分らないが、句前の「一片氷心」は『唐詩選』に載る王昌齡の七絶「芙蓉楼送辛漸（芙蓉楼にて辛漸を送る）」の結句に由来した句題である。

寒雨連江夜入呉、
平明送客楚山孤。
洛陽親友如相問、
一片氷心在玉壺。

寒雨 江に連なつて 夜 呉に入る
平明 客を送つて 楚山孤なり
洛陽の親友 如し相問はば
一片の氷心 玉壺に有りと

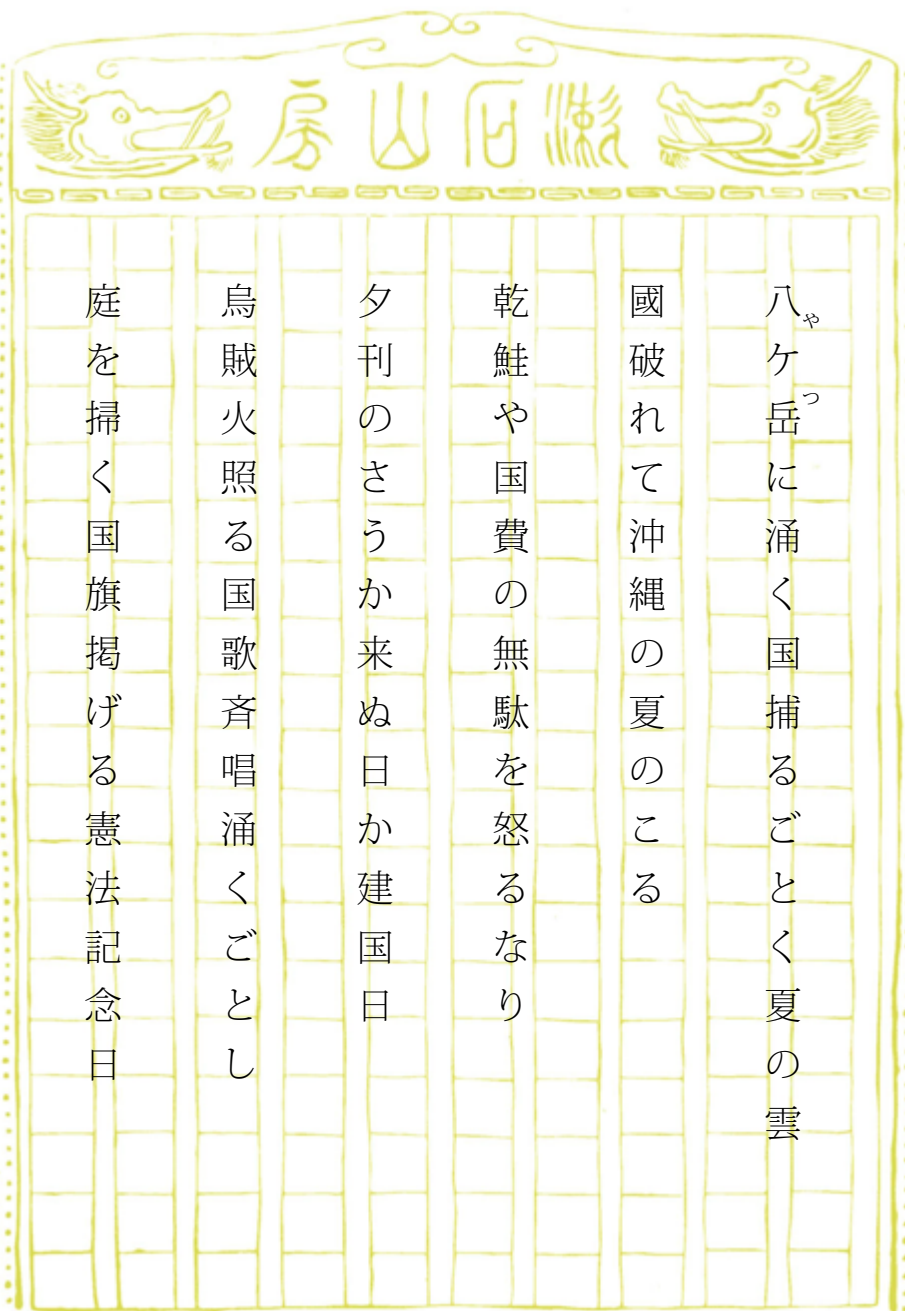
王昌齡の七絶は秀逸な送別の詩として広く知られる。呉（現在の南京）の地方官吏に左遷された王昌齡は、洛陽へ帰る友人の辛漸を、大雨の中、下流の鎮江市まで見送り、夜通し芙蓉楼で送別の宴を開いた。話は尽きなく別れの杯を酌み交わすうちに、いつの間にか夜が明けた。いよいよ友人の辛漸と別れの時がくると、雨も止んで、楚の山はぼつねん姿を現した。「もし、洛陽の友人が、王昌齡はどうしているかと訪ねたら、我が心は玉壺に納めた一片の氷のように清く澄み切つて微塵も世塵に染まっていなと告げてくれ」と辛漸に伝えた。この詩意は現在の一般的な解説であるが、南郭は『唐詩選国字解』の中で、この詩の結句について次のように解釈している。

「一片の氷心」とは、世の中に望みは絶へきつたを云ふ。……むかし都にいた時は、功名富貴をも頼みにしたが、今は吾が一片の心が玉壺の氷の如くさっぱりとして、世を棄て、功名富貴を願ふ処存はないから、もう都へ行く気はなくなつたと云うてくれられい^(註)。

子功の句前における「一片氷心」は、恐らく南郭的に享受したのであろう。彼は塵世を遠く離れて涼むと、功名心は少しずつ消えていくという俳味溢れる筆触で描いて、齷齪せずに悠然として涼味を満喫できる今こそ最高だよと声高に唱えた。

王昌齡が南朝宋の詩人鮑照の「直きこと朱糸の繩の如く、清きこと玉壺の氷の如し」（白頭吟）という表現を借りて詠んだ「一片氷心在玉壺」は、時空のトンネルを超えて子功の俳諧に継承されている。

注：服部南郭『唐詩選国字解』3（日野龍夫氏校注 平凡社 1982年3月10日） 138頁



あを柳集

兼題 国

佐藤喜孝 選

八ヶ岳に涌く国捕るごとく夏の雲

夏の雲はもくもくと天を突く勢ひで涌上がる積乱雲であらう。「国捕る」といふ大仰な言い方が広々とした空を領する雲の様子を個性ある表現で捕へた。信濃は美濃・甲斐・越後などの強国に囲まれてゐる。こんな古い国名が生きてゐるのも信州信濃である。

國破れて沖縄の夏のこる

「國破山河在 城春草木深」からはじまる杜甫の『春望』はよく知られてゐる。『奥の細道』の「國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。夏草や 兵どもが夢の跡」も知られてゐる。掲句は「国」ではなく「國」を使つてゐる。現在の日本は国、戦前の日本は國といふイメージが伺へる。民主党が政治を行ふやうになつて沖縄の基地問題が炙り出された。これは安保条約を日本がどう考へるかといふ問題かもしれないが、沖縄慰霊の日は六月二十三日、沖縄県のみの日である。これから沖縄の問題を考へる時は

この句を想起することであらう。

乾鮭や国費の無駄を怒るなり

「乾鮭も空也の瘦も寒の中 芭蕉」乾鮭は冬の季語、「みちのくの乾鮭獣の如く吊り 青邨」もあるが、私はまだ見た事がない。写真で見ると鮭のミイラ、歯を剥き出した顔など異様である。怒りの風貌と云へるだらう。もちろん「国費の無駄を怒る」のは作者。簡明に怒りを表すところがよい。

夕刊のさうか来ぬ日か建国日

「国」といふ題ゆへか社会性のあるテーマが多く目についた。いつもの時刻に待つてゐる夕刊配達が来ない。ふと、ああさうか来ぬ日は休日かと気がついた、という呟きがそのまま句になつてゐる。建国記念日を忘れる、あるいは重んじてゐないと云ふことが何となく知れる。力まない表現だが内容とは比例しない。

庭を掃く国旗掲げる憲法記念日

“庭を掃く。国旗掲げる。憲法記念日。”と読んだ。事柄を端的に叙してゐる。三段切である。庭を掃清めて国旗を掲げる。祝祭日にはすべてさうなのであらうか。憲法記念日だからであると

断つてゐる。作者にとつて大切な祝祭日なのであらう。大切な日と云ふことを“庭を掃く”で伝へてゐる。三段切は畳みかける勢ひがあり使ひ処によつては効果的である。

題詠 国・國・囡 (順不同)

サッカーで久々国歌夏の雲

鈴木多枝子

夏の道近付いて来る国訛

韓ドラのカラスのぬない国の旅

安部 里子

青嵐いい国つくる鎌倉へ

梅雨に入る右往左往の国づくり

十国峠関八州は梅雨の中

森 理和

国産の食にこだはりラムネかな

国鉄と云はなくなりし柿若葉

竹内 弘子

秋津国の臍の辺りも梅雨に入る
青りんご耳にあまゆる国訛

入学す国民学校と名が変はり
八ヶ^ゃ岳に涌く国捕るごとく夏の雲

東 亜 未

夏落葉下に何かの稚魚の国
産土のすでに他国の祭かな

篠田 純子

ブルーシートの中は天国梅雨ごもり

木村茂登子

世界の国一つにサツカー夏の陣

盆踊お国訛の佐渡おけさ

堀内 一郎

ささくれし国焼酎を口にする

國破れて沖縄の夏のこる

さらばとて老鶯のケキヨ国訛

夏休鈴を鳴らして国境

国道の真中に巡查夏休

吉弘 恭子

獅子国のお茶を右手に籐寢椅子

どこまでも稲の波湧く美し国

右手に海左手に稲穂越の国

海荒るる国後島の春未だ

国言葉すらと飛びだす花の宴

嬰のこゑはらと国色散るは白

さくら咲く国のまほろば裾野かな

冷奴旅も果なる国東に

田中 藤穂

異国人親子もまじる金魚釣

丈高く鎌柄燃えて国府跡

乾鮭や国費の無駄を怒るなり

夕刊のさうか来ぬ日か建国日

定梶じよう

国破れ三月城市襁褓干す

ぼうたんや唐に傾国何ぞ多き

烏賊火照る国歌斉唱涌くことし

鳥渡る越の国原散居村

庭を掃く国旗掲げる憲法記念日

国許の母からですと筍を

夏場所の外国力士四股を踏む

国境関所を残す花南天

美し国伊勢のポスター鮑海女

北國に北の國あり薬狩

めひらくと六月越後水の國

山國をボンと蓋せり夏の雲

敵國は輕音樂ぞ盆踊

長崎 桂子

佐藤 喜孝

六月の句会

傳

中野区 カフェ傳

晴れ晴れと大地ふくらむ麦の秋
公園にゐるのは大人昼蛙
筍を只ころがして直売所
山國をボンと蓋する夏の雲
父の日や姉しか知らず父母のこと
川筋は風の道なり五月鯉
青芝にをちさん顔の盲導犬
握握のなかに春の風すこし
ふとり過ぎ誉められてゐる佃鮎
煎餅はざらめが一番大夕立
夕立や草木の匂ひ残しさる
弓なりに瑠璃の薨や夏の空
夏落葉下に何かの稚魚の国
負けいくさ終りし頃の麦埃
泰山木は仰ぎて見る木夏の風
そら豆や三点倒立ピタリ決め
高階の映画館降り夕立かな
走り梅雨サックス奏者に恋をする
裕子

あを吟行会

新宿伊勢丹・丸井屋上庭園

夏草をくぐりて雀足早に
大仰に六月の風花ゆらす
山蟻が跨いでゆきぬ蟻の道
声心地よし園丁の夏帽子
まだ咲かぬトネリコ薔花火めく
風の中花食べてゐるかたつむり
青芝に都会の子等の遊ぶ声
須磨子
恭子
喜孝
夏子
藤穂
喜久恵
敏子

七座句会

中野区・小川苑

めまとひをふりきりほつとしてひとり
窓あけて向うの窓も薄暑なる
木もれ日のゆらぐ地面も夏となり
狭き田のちよいと曲りし植田かな
自販機にふるさとの水街暑し
白玉や昭和良き世か悪き世か
一棹分高く伸び揺る今年竹
木の吐息花の喘ぎや樺の忌
五月雨やシャッター降ろす町工場
綾子
木枯
喜孝
東亜未
須磨子
藤穂
理和
恭子
多枝子

連句勉強会 毎月第2日曜
希望者は左記まで (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

「あを」句集叢書のおしらせ

21世紀にマイペースではじめた「あを」も会員諸兄姉のたゆまぬ作句努力に引つ張られはや十年になるとしり驚いてゐる。驚いてばかりもゐられない。歩いてきた目印になるのではないかと「あを」句集叢書を計画した。自選二五〇句を電子出版で句集にし、インターネットで広く読んでいただくことにした。自選をしると自身に突きつけたところ四六の墓状態にいまなつてゐる。日本はこのところ電子出版の声が賑やかである。私もどのやうに造ろうかと分厚い本を買つてきて勉強中。といふ訳で細部まで計画が煮詰まつてゐるわけではありませんが、皆様のお手元に届いた俳句から二五〇句選んでください。なほ、電子出版、インターネットの公開は無料です。ご参加お待ちしてをります。期日は決めておりませんのでマイペースでおねがひします。選句の上掲載順そのほかご希望がございましたらご相談させていただきます。

B6 一頁二句組 略歴・あとがきで簡潔に仕上げる予定です。

◆ 新入会員

續木文子 様

東京都渋谷区代々木

◆ 御芳志御礼

田中藤穂 様

二〇一〇年八月号

発行日 八月七日

発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト カット／恩田秋夫・松村美智子 佐藤喜孝 竹僊房

郵便振替 00130・655526 (会費 一〇〇〇〇円 (送料共)／一年 (あを発行所) 乱丁・落丁お取替えます。)